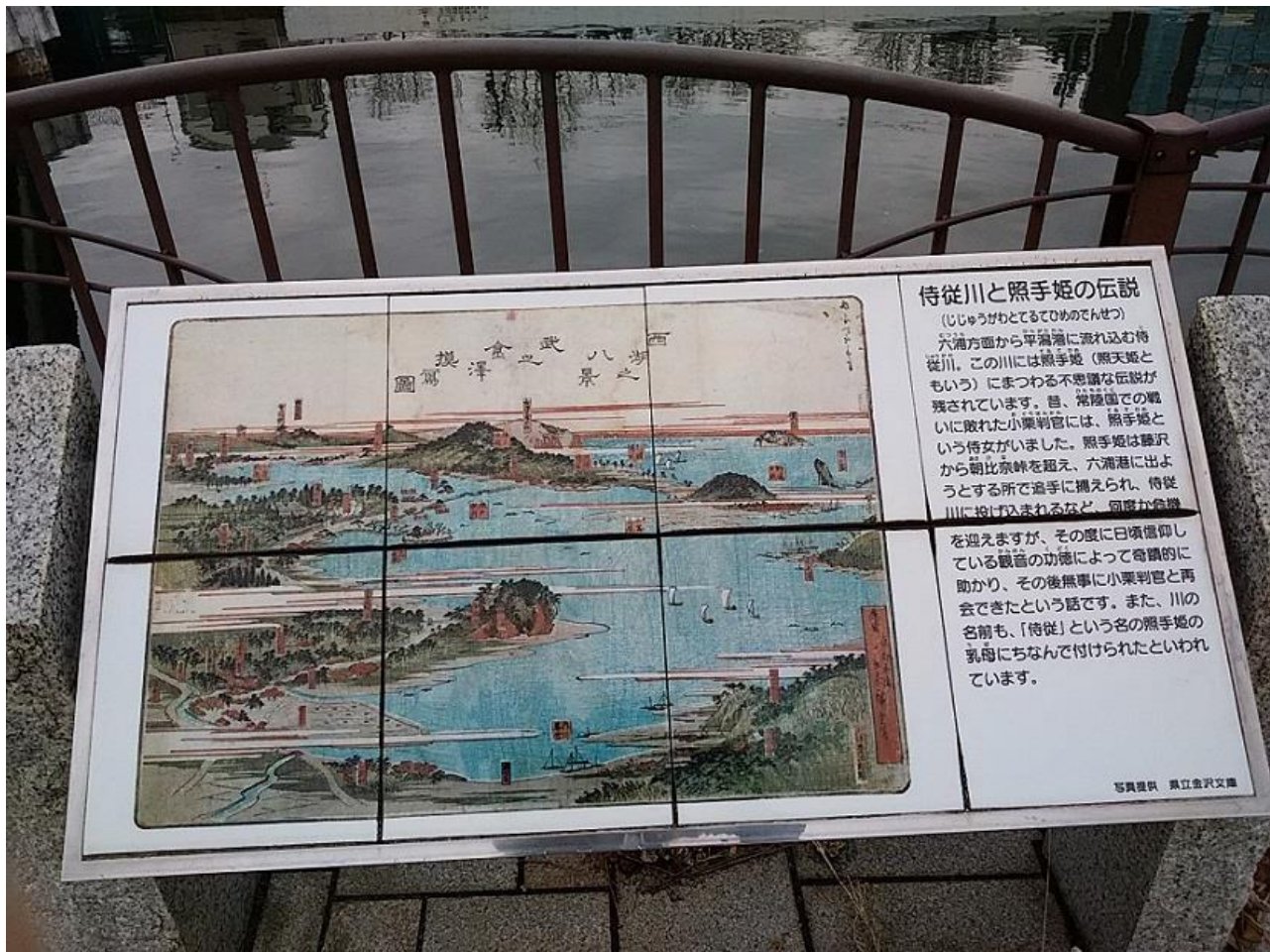


侍従川河畔にある 版画 歌川広重 金沢八景 陶板（一部破損）



金沢八景版画 侍従川河畔 陶板 称名の晩鐘



金沢八景版画 侍従川河畔 陶板 洲崎の晴嵐(破損)



侍従川河畔にある版画 陶板 金沢八景 野島の夕照



侍従川河畔 陶板 金沢八景 内川の暮雪



侍従川河畔にある版画 陶板 金沢八景 平瀨の落雁



平瀨落雁

(ひらがたのらくがん)

野島の内側にあたる平瀨は一面の浅瀬で、泥亀新田の開発と同じころに塩田として開発されたところです。画面には、落雁の群れとともに、潮干狩をする人々が描かれています。平瀨周辺の漁民が副業として行っていたのでしょう。この平瀨湾は、内陸の安全な浅瀬として、昭和30年代まで潮干狩や海水浴の名所だったのです。

(跡とむる 真砂にものし 数をへてしほの干瀨に 落るかりかね)

写真提供 奥立金沢文庫

侍従川河畔 陶板 金沢八景 乙舳の帰帆



乙舳帰帆

(おつとものはん)

野島の裏側、乙舳海岸（現在の海公園あたり）から小湊の岬を望み、帆船が帰ってくる光景を描いたものです。「おつとも」とは、金沢一帯の海岸線が船の舳の形をしていたのにちなんで名付けられました。平瀨湾は時代が下るにつれて土砂の堆積が進み、海の高まで大型船が入ることができなくなりましたが、野島

や乙舳の付近は、なお風を得つ避難所として利用されていました。当時の東京湾は、金沢の良港を過ぎると、神奈川の瀬まで、小湊・本枝と断崖が海に落ち込む荒瀬だったのです。

(沖つ船 ほのかにみしも とる舵のん おとものうらに かへる夕波)

写真提供 奥立金沢文庫

侍従川河畔にある版画 陶板 金沢八景 瀬戸の秋月



瀬戸秋月

(せとのしゅうげつ)

瀬戸橋の上に浮かぶ月を眺めた夜景です。手前右手に描かれる「東屋」という料亭の裏から、照手の松小島と瀬戸橋を見越して野島を望む構図となっており、平瀬港や野島は、はるか遠く、墨絵のように描かれています。もとは、八景見物の名所であった能見堂の山頂から、瀬戸方面に向かって見る多目をさして見えたものでしたが、風光の変化から瀬戸橋付近で見上げた月を指すようになりました。

(よるなみの 瀬戸の秋風
小夜更けて 千里のおきに
すめる月かけ)

写真提供 奥立金沢文庫

侍従川河畔 陶板 金沢八景 小泉の夜雨



小泉夜雨

(こずみのやう)

雨の絵の名作といわれる「小泉夜雨」の舞台となった小泉は、通説では釜利谷の入口、手子神社の付近とされていますが、八景のなかでもとりわけ豪雨の激しいところです。広重がこの絵を描いた頃は、泥亀新田(江戸時代の医師・永徳泥亀によって始められた埋立事業)の開発も進み、瀬戸橋で入り海は仕切られてい

ました。あたりの風景はすっかり変わりましたが、手子神社はいまもなお残り、昔のたずまいをみせています。

(かちまくら とまもる雨も
袖かけて なみたふる江の
音をそおもふ)

写真提供 奥立金沢文庫